

草原ものがたり

椎野 満代

明け方

トイレのスリッパを寝台にして
コオロギが死んでいた

草の一族のみどりにまぎれて
風に吹かれ生きていた

そのまま

あつというまに

一滴の水分ものこさず

枯れ草のようになっていた

点火すれば

たちまち

草原ものがたりを呼びよせ

青い炎となって燃えさかり

一瞬で消える

それは屍だしかばね

あそこに「おかえり」

わたしは窓からポイーとはるか中天へと

ほうり投げる

思想も欲もなく

己の影だけを食べつくして消えていく

生から死へ紙きれのようなうすい境界をこえ

空虚のさみしさを

水銀のようにかがやかせて

ころ・ころ・ころと啼く声が

生々しく湿って匂ってくる